

今はまだ岸边漂う笹舟が

「共謀罪」法案が衆院を通った 23 日夜も、若者たちは国会前で声をあげた(朝日新聞 5 月 24 日朝刊)。

標題は同紙 28 日、福島申二編集委員「日曜に想う」。昨日から衆議院で危険きわまりない共謀罪法案の審議が始まった。考えさせられる指摘も多く、後半だけでも紹介しておきたい。



戦前の治安維持法は、成立すると可能な限り拡大解釈された。解釈が限界を超すと改悪が図られた。「不当に範囲を拡大して無辜の民にまでは及ぼさない」と言って生まれた法がおそろべき怪物と化していく中で、おびただしい理不尽と悲劇が起き、戦争で国は破滅した。

「はじめにおわりがある。抵抗するなら最初に抵抗せよ」と朝日新聞の大先輩で反骨のジャーナリストだった故・むのたけじ氏は言っていた。真を射る言葉は苦い昭和の体験に根ざしている。

今の共謀罪をただちに治安維持法の再来とは言えないだろうし、当時とは司法や社会のありようも違う。とはいえ相似形は疑いようがない。泳げぬ者が海に落ちたような大臣答弁のしどろもどろこそが、この法案がいかにか曖昧で、恣意的に拡大解釈されうるかを物語っている。犯罪者を捕らえるというより、捕らえたい者を犯罪者にする道具になりかねない。「テロ」「五輪」と反論を封じやすい語に包まれて、危うい卵は参議院に送られ、産み落とされようとしている。



笹舟を岸边から浮かべると、しばらくはくるくる漂っているが、ひとたび川の流れるに乗ると一気に下っていく。今の政権になって、特定秘密保護法や集団的自衛権を含む安保法が相次いで成立し

た。今度は共謀罪、さらに 3 年後の憲法改変の旗を掲げ、政権は自らの望む「国のかたち」への作り替えを急ぐ。

「平和安全法制(安保法)の時、戦争法案って言われた。特定秘密保護法が成立する時、自由がなくなると言われた。2 年経って、何も変わらない」と菅官房長官が先日語ったそうだ。すぐ目に見えて変わるものなら分かりやすい。本当に怖いのは、共謀罪にしても、確かな自覚症状のないままにこの国を深いところから蝕んでいくことだ。

いまはまだ岸边を漂っている日本という笹舟が、あるとき一気に戻れぬ流れに乗ってしまわないか。不安は膨らむ。

(2017 年 5 月 30 日)